

2019年から第3次読書文化振興基本計画を掲げ図書館や書店での読書推進活動を奨励、中国では政府主導による「全民閲読(全国民読書)」運動、ロシアでは、書店が2都市集中を改善するために官営での全国流通組織を進めています。同じ課題に対し、我が国は民間主導、アジア近隣国は政府主導の違いが伺えます。



ここで、わが国の政府の施策として、昨年10月に文部科学省が発表した「高等教育のグランドデザイン」に注目してみます。今年生まれた方々が成人となる2040年はどうのような社会になっているかを想定し、高等教育の将来像が示されています。20年後の社会を考えるキーワードは、SDGs、Society5.0、第4次産業革命、人生100年時代、グローバル化、地方創生。そのような社会に対するグランドデザインとして、学修者本位の教育への転換、多様性と柔軟性を確保する教育体制、あらゆる世代が学ぶ「知の基盤」づくり、などが掲げられています。(詳細は文部科学省HP参照)。文字だけが踊っていて概念的で具体性が判りにくいかもかもしれません。これらの概念に関連する事例として最近様々な形態の書店が現れています。

街中の書店では、単体で読むだけの「本」ではなく、異業種とのコラボで双方の価値を高める取り組みが注目されています。例えば、無印良品が展開する「MUJI BOOKS」(京都ではイオンモールKYOTO店)、お店のコンセプトと本が上手くマッチングし、本から溢れる言葉が既存の商品力を高めています。最近オープンするホテルではライブラリーを整備する事例が増え、中には書店を併設するホテルもあります。酒屋や飲食店、雑貨店や家具店他、「本」を脇役としてお店のイメージアッ

プにつなげています。言葉の力は強いのです。

大学図書館も変わってきました。大学の教育研究に必要な取書を行い、閲覧や貸し出しを行う機能に加え、何か新しい価値を発見する、創造するための学びの空間となる機能です。例えば近畿大学のアカデミックシアターでは、従来の分類とは違う切り口でテーマを定め、ユニークな棚や閲覧席、コミックから入門書、専門書へつなげる大胆な蔵書構成や演出により、本に関心が無かった学生へ「知」を誘う刺激的な試みが行われています。最近の建設された図書館はキャンパス内の居心地のよい空間としての機能も重視されるようになってきました。

地域と連携する学びの場としての図書館・書店も注目を浴びています。岩手県では公営の書店がオープンしました。桶川市では駅前に図書館と書店とイベントスペースが設けられ、周辺の大学が地域の皆さんに大学の価値をアピールするイベントが催されています。

大学と取引する書店は、単に商品を納めるだけでなく、利用を促進するためのセミナーの開催、学生が主体となった書店での図書館資料選書や利用促進企画など、それぞれの業者が保有する資源やノウハウを活用して、モノだけではなくコトを意識したサービスに取り組んでいます。

誰もが均等に学び、AIでは実現できない発想力や創造力の源、生涯学べる環境づくり、地方創生の核として施設など、40年後の社会に貢献できる機能や要素が図書館や書店には備わっています。そのためには将来を考えた発想の転換が必要であり、大学図書館は多様な利用者、ニーズに応えるための多彩なサービス、書店はそれら変化への対応と経営基盤を維持するための新しいビジネスモデル作りが必要になってきています。これからの書店には、コンテンツを販売するだけでなく、コンテンツそのもの及び関連するすべての機能や要素を余すことなく引き出し、「ヒト×モノ×コト×場」をつなぎ、未来の学びを生み出す役割が求められているのです。

いで たけし (丸善雄松堂書店・京都支店長)